TAKE FREE

MA・SO・BO通信

2021 9▶10

［寄稿］

「チェコの子どもたちとカルチャ・キャンプ」

（人形劇師）　沢　則行

先週、こぐま座で人形劇団ぶるどっく with バーコードの「芝浜」を観た。ぶっ飛んだ。マジで人形劇の未来がそこにあった。メンバは小・中学から芝居づくりを教わって来た大学生たち。指導している矢吹英孝艦長と彼のクルーは恐るべしだ。

今が７月末なので「ああ、ホントは今ごろ‥」なんてつい思う。毎年夏にはチェコの山に入って、子どもたちと人形劇を作っているはずなんだ。今年は日本の仕事でどうしても参加できなかった。汗と泥にまみれたアイツらの顔が浮かぶ‥

チェコでは夏休みになると、山や湖で子どもたちを集めてカルチャ・キャンプがよく開かれる。おとなといっしょにコテージやテントで生活し、何か一つのサブジェクト（科目）に取り組む。ぼくが招かれているロシュコポフという村でも、一週ごとにサブジェクトが替わり、音楽やダンス、人形劇や映画づくり、山の鉱石を採掘するって科目もある。中には３科目ぐらい、つまり３週間子どもをキャンプに入れたままの親もいる笑。サブジェクトごとにプロの講師が担当し、キャンプ全体は若いスタッフ十数名がプロデュースして生活全般、医療面も管理する。

ぼくが教えるのは「フィギュア・シアタ」で、いろいろな素材を工夫して人形や仮面、影絵を作り、自分たちの身体も動かしてドタバタ稽古する。キャンプの最終日、子どもたちを迎えに来た家族の前で発表会をする、という段取りだ。

数えてみたらこの仕事、17年間続いている。毎年いろいろなやり方を試して喜んだり反省したり。現場に入る初日は、送迎の車に山ほど素材を積み込んでプラハの自宅からキャンプ場に向かう。

例えば最初の頃、大人数でまるまる一週間かけて巨大な人形を何体も作り、太鼓を叩きながら街を練り歩く、なんていう企画をやっていた。だが作業工程が子どもたちのスケジュール感覚を超えていて完成までの全体像がつかめないようで、じきに飽きてさぼり出したり、泣きごを言いはじめる。今は大きな人形をひつかふたつに絞り、年長の子どもを選で、担当のおとなも舞台の大道具プロあてて、デザインから完成までキッチリといっしょに作り上げる、という方法に変わっている。

この「全体像がつかめるモノづくり」というのが、実は今の子どもたちには重要な感じ。大人の指導に従ってわけもわからず作業を続け、完成したときにようやく辿ってきた工程を理解してハッとする。という昔ながらの「師匠と弟子」的指導は、今の子どもの体質に合わないみたいだ。もっとヴィジュアルに近め近めのゴールが見えないと動けない。それが良いか悪いかはわからない。

そこで「箱の人形劇場」という１～２日で完成する工作＋芝居づくりを試してみた。各グループも１、２名ずつで、デザインやストーリィは自由。小さな舞台の背景や大道具に使う絵も、自力で描けない時のためにフランスの機内誌から切り取った写真を自由に貼り付ける、という方法にした。甘すぎかなあ？なんてこっちの心配をよそに、子どもたちは終日手を動かし続けて、とてもユニークで愉快な箱劇場がキャンプ場の丘や街の通りにたくさんオープンした。

ビニル袋で空飛ぶクラゲを作ったり、キャンプ場の山道を観客と移動しながら仲間が増えていく「さるかにがっせん」や「ももたろう」など。かつて参加者だった小学生が今は、大学生のアシスタントになって、毎回あっと驚くアイディアで助けてくれる。加えて気まぐれな子どもたちのイメージはあっちこっちに広がって、なんとかプログラムを整理してマニュアル化しようとするぼくを混乱させる。で、毎年困ったな、とアタマを抱えて（素材も抱えて）山に入るというわけ。

うーん、でも、きっとこれでいいのだな。子どもたちとの関わりをシステム化するなんてたぶんムリなんだ。来年も彼らといっしょに混沌を楽しもう（^ω^）

略歴

北海道小樽市出身

1991年にフランス、92年に文化庁在外研修派遣でチェコへ。以後、プラハを拠点に世界20ヶ国以上で公演、また、チェコ国立芸術アカデミー演劇・人形劇学部を始め、多くの教育現場で講座、ワークショップを行う。

ヨーロッパ文化賞「フランツ・カフカ・メダル」授与、EU文化都市賞など国際的受賞多数。東京2020オリパラ大会の公式文化プログラム「東京2020 NIPPONフェスティバル～巨大人形プロジェクト『モッコ』」の人形デザイン設計および人形製作操演総指揮を担う。

2021年8月20日発行／MA・SO・BOに関する最新情報、通信のバックナンバーは、こぐま座のホームページからもご覧いただけます。
http://www.syaa.jp/sisetu/geki.jou/index.html

「私に創る喜びを育んだ中島児童会館２」～北高演劇部と青い鳥グループ～ 鈴木　喜三夫

一九五一年１月７日の写真には、四九年にオープンした札幌市中島児童会館のカマボコ兵舎を改良した建物の中にある集会室に大勢の子どもたちが集まっていた。新年子ども大会である。中央の３人の若者は札幌北高演劇部員。前の年の文化祭で上演したコント『腕自慢の医者達』を演じている。左から斎藤勉、松浦彌親、小野彰一郎で演出をした私の先輩たちだった。その右横には「札幌子供の友会」の和田義雄（童話家）と小林覺一（歯科医）のお二人が並んでいる。二人とも当時、口演童話の第一人者だった。

五〇年春、私は一条中学校を卒業、北高へ入学。さっそく演劇部に入った。「札幌子供の友会」や一条中学で芽生えた芝居への興味が私のなかで大きくなっていた。１年のとき西高との合同公演に新美南吉の『ごん狐』を脚色・演出し、２年のときにはこの年から始まった北海道高校演劇大会に参加、『ヌタックカムシュペ』（五條彰作）で全道優勝。３年のときは生徒の初創作劇『パンドラの筐（はこ）』を上演した。写真の出演もそのクラブ活動の一環に違いない。

若かった私はその頃、児童会館と同じ中島公園にあったＮＨＫ札幌放送局に出入りしていた。そこで市内の高校生たちと「テアトロ・チロロ」というグループを作り、ラジオドラマなどにも挑戦していた。そのグループがなんと専属のアンサンブル（いくつかの楽器）を抱えていたとは驚きだ。

もう一つ、私が関わった「札幌子供の友会」、一条中学、北高、ＮＨＫなどの有志と「青い鳥グループ」を作っていた。私や仲間の家に集まって食事会をやったり、ピクニックや海水浴にいって親睦を重ねた。そのグループが唯一つ創作活動をしたことがある。スライドドラマ「ミミ―物語」の製作―私が高校１年に北海道新聞に連載した絵物語をもとに脚本を書き、絵を描き、仲間が所属する「ダイヤ商会」でスライド化。ＮＨＫのスタジオを借りて中にいた役者仲間たちの配役で録音するという段取りだった。もちろん音楽は「チロロ・アンサンブル」。お披露目は五二年（日程の記録なし）の中島児童会館の大きなスクリーンだった。大好評で、その他でも何回か上映された。

それらの活動も五三年春、私の大学入学で終る。中島児童会館とお付き合いもこれで終了かと思ったが、何年か後で、私と「中島児童会館」は再び繋がっていく。

suzuki　kimio
鈴木　喜三夫

PROFILE
一九三一年・札幌生まれ。札幌北高から東京・玉川学園大学へ入学。五六年中退してテレビ作家で活動後、札幌へ帰り五九年専門劇団「さっぽろ」創設。八六年フリー演出家、二〇〇九年「座・れら」を結成、現在に至る。九四年北海道文化奨励賞、〇七年北海道文化賞受賞。〇四年「北海道演劇 1945－2000」（北海道新聞社）上梓。

※MA・SO・BO 通信第六号訂正のお知らせ
裏面　中段　軍団少年 ×　軍国少年〇　となります。

MA・SO・BO
本 シェルジュ

KONNO MICHIHIRO
今野　道裕　先生
國學院大學北海道短期大学部
幼児・児童教育学科
幼児保育コース　教授

PROFILE
1955 年生まれ
高校時代より人形劇活動を始める小学校教員 28 年を経て 2006 年～市立名寄短期大学教授 2021 年～
國學院大學北海道短期 大学部教授
北海道人形劇協会理事
芸術と遊び創造協会会員
日本福祉文化学会会員
北海道教育学会会員
北海道芸術教育の会
ひとり人形劇団「オホーツク風雲ワクワク団 n」として活動中
著作：『作ってあそべる製作ずかん～3・4・5 歳児の保育に～』
（学研・2013 年 12 月）

本の紹介⑦ 『人形劇 ― なにを・どう』（オブラスツォーフ他 いかだ社）

私の青春は、高校時代に始めた「人形劇」が間違いなく中心の一つでした。「モノが生きている（ように見える）」ことに魅了されていました。元々「作る」という行為は好きでしたが、青春時代にありがちな根本命題や理論（「生きるとは？」「人形劇とはなにか？」とか）にも関心が広がっていました。

その時に出逢ったのが、この本。セルゲイ・オブラスツォーフ。ソビエト人形劇の指導者。他にも数名の論文が大井数雄によって訳されています。改めて本を見てみると、びっしり傍線が引かれています。「あらゆる芸術が子どもたちに不可欠のもの。人形劇も、なんら異なることはありません」、「人形の魅力は、奇妙なことに人形が生きていない、ということにこそある」…。その中に書かれていたことばは、今も「私」に生きています。

熱かったなあ。

657 美術館からのお知らせ
～657cm のちいさな美術館～

あべ弘士・絵本原画展『氷上カーニバル』
（のら書店）

旭川在住の絵本作家あべ弘士さんの絵本原画展を実施します。
氷上カーニバルは、札幌市で大正時代の終わりから昭和にかけて行われた冬のおまつりです。このおまつりは、当時の子どもたちの心に深い感動を残し、児童文学作家の神沢利子さんの作品『いないいないばあや』にも描かれています。人々の生きる喜びが溢れる、美しく楽しい夜の絵本の原画を是非、ご観覧ください。

■期　間：8 月 3 日（火）～ 10 月 3 日（日）
■時　間：9：00 ～ 17：00　■入場料：無料
■会　場：札幌市中島児童会館・こぐま座内・657 美術館

大人向け　こどものまなび塾 2021 年度「ボランティア養成講習会」

昔あそびや絵本の読み聞かせ、自然のなかでの遊びなど、さまざまな子どもの遊びを実践的に学ぶ講習会です。

第 1 期「けん玉」…8 月 27 日（金）・28 日（土）・29 日（日）
第 2 期「読み聞かせ」…9 月 15 日（水）・16 日（木）・17 日（金）・18 日（土）
第 3 期「自然あそび」…10 月 8 日（金）・9 日（土）・10 日（日）
第 4 期「あそびのお店を開店しよう」…11 月 4 日（木）・5 日（金）・6 日（土）・7 日（日）

■対象・定員：18 歳以上　昼・夜各 15 名
■参加費：1 コース 3000 円（学生 1000 円）
■会　場：札幌市中島児童会館
■詳細は、下記のお問い合わせへご連絡ください。

参加申込受付中

【お問い合わせ・申し込み】
札幌市中島児童会館　TEL 011-511-3397
札幌市こども人形劇場こぐま座　TEL 011-512-6886
住所：札幌市中央区中島公園 1－1
（地下鉄南北線中島公園駅下車 3 番出口より徒歩 1 分）

編集後記

寄稿して頂いている方々の文章を読み、ごっこ遊びの延長が人形劇・演劇・映画・ドラマに変化し、日常の遊びから想像力が生まれ、自分ではできないことを可能にしている人々がいる。しかし、子どもが大きくなるにつれ、「まだ、そんな幼い遊びをしているのか？」と声をかけてしまう。好きな遊びに没頭し極めれば誰もが認めるその道のプロとなる。そうした人々の想像力が新しい文化を生み、新たな物が開発される。子どもが没頭していることに援助はするが、無駄な口は挟まないようにしよう考えさせられる今日この頃である。（川村）

発行／札幌市中島児童会館・札幌市こども人形劇場こぐま座指定管理者／公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会